



日本植物分類学会

ニュースレター

No. 12

Feb. 2004

目 次

諸報告

- 第3回日本植物分類学会賞受賞者の決定.....2
 メール評議員会議事抄録.....2
 国際植物命名規約邦訳委員会 2003年度の活動報告.....3
 日本分類学会連合および植物分類学関連学会連絡会の活動報告.....4

お知らせ

- 日本植物分類学会第3回大会公開シンポジウムのお知らせ.....5
 総会における審議事項について.....5
 評議員会開催のお知らせ.....6
 2004年度野外研修会のお知らせ.....6
 2003年度事業報告(案).....7
 2003年度決算報告(案).....8
 2004年度事業計画(案).....9
 2004年度予算(案).....10
 会費納入と自動振替利用のお願い.....11
 メールアドレスご確認のお願い.....11
 故井上健先生の別刷り集をお分けいたします.....12
 信州大学理学部植物標本庫(SHIN)のご案内.....13
 2003年度日本植物分類学会講演会.....14
 多芸多才な分類学会講演会.....14

書評

- 横浜の植物.....15
 Historical Biogeography: An Introduction.....16
 人類の生存を支えた根栽農耕 イモとヒト.....17
 絶滅危惧植物図鑑レッドデータプランツ.....19

連絡員からときどき便り

- ・インタノン山の植物・.....20
 チイ便り・2・～お墓のチイ～.....21
 会員消息.....22

諸報告

第3回日本植物分類学会賞受賞者の決定

学会賞選考委員会委員長 角野康郎

第3回日本植物分類学会賞は、推薦のあった13名の候補者について学会賞選考委員会において審議した結果、下記のように決定致しました。

村上哲明 氏（京都大学理学研究科助教授）

村田 源 氏（前京都大学理学部講師）

村上会員は、中国、マレーシア、タイ、マダガスカル、中南米などで本格的な野外調査を実施し、シダ植物の国際共同研究を推進されました。その中で、これまで単一種と考えられていた広分布種が、塩基配列、形態、生態、生殖などの面で識別される複数種であることを多くの例で確認し、「分子 - 分類」学を提唱して種の認識に新たな局面を切り開かれました。現在もその研究は途上にあり、今後の発展が期待されます。

村田会員は、長年の研究によって日本の植物相とその成り立ちの解明に寄与されました。北村四郎先生らとともにまとめられた保育社の植物図鑑全5巻は、日本の植物研究に欠かせない図鑑として、今日まで幅広く利用され続けています。また、全国のアマチュア研究者の採集標本について懇切丁寧に同定の指導をされ、地方植物誌の充実にも大きく貢献されました。最近レッドデータブック近畿研究会代表として、全国に先駆けた地方版レッドデータブックの編纂に中心的役割を果たされるなど、絶滅危惧植物の保全にも精力的に活動しておられます。これらの広範な業績が評価されました。

メール評議員会議事抄録

庶務幹事 遊川知久

2004年1月5日～14日に2004年度第1回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は会計の決算案と予算案、事業の報告案と計画案を評議員の方々に審議していただき、総会までの会務・会計執行の指針を得るためのものです。なお、本ニュースレターでお知らせする、3月13日の評議員会と14日の総会に提案される議案には、その後3ヶ月の推移を考慮した最低限の修正が加えられている箇所がありますが、どうぞご了承ください。

開催日時 2004年1月5日～14日

開催方法 電子メール等の媒体を用いた会議

出欠確認

- ・全員出席
- ・議長として加藤雅啓氏が選出された
- ・議事録署名人として邑田仁氏と伊藤元己氏が選出された

審議事項

第1号議案 2003年度決算案

第2号議案 2004年度予算案

第3号議案 2003年度事業報告案・2004年度事業計画案

第4号議案 年会費値上げについて

審議結果

第1～3号議案は、承認数11、非承認0、白票2で承認された。第4号議案については引き続き審議する。また、会費未納会員の問題、学会賞のいっそうの充実などについて協議された。

国際植物命名規約邦訳委員会 2003年度の活動報告

委員長 大橋広好

国際植物命名規約邦訳委員会は2002年8月に設立され、大橋広好(委員長)、永益英敏(副委員長)、黒沢高秀、邑田仁、中井秀樹、根本智行、野崎久義、岡田元、米倉浩司で構成されています。本委員会は「国際植物命名規約(セントルイス規約)2000」を翻訳し、2003年11月25日にその「日本語版」を学会から発行しました。発行が委員会で予定していたよりも半年ほど遅れましたが、委員会の目的を無事に達成できたことをご報告します。学会のホームページにも紹介されています(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsps/new/2003/meimeikiyaku.html>)。

これで委員会の実質的な活動は終わりましたが、3月の分類学会総会で解散が承認されるまでの間、各委員には批判的に本書を再読して下さるようお願いしています。規約としての性格上、本書の翻訳に間違いがあると誤った学名の発表を招きかねないと思いますので、瑣末と考えられるものでも公表したいと考えています。会員の皆様にも遠慮のないご指摘を大橋(ohashi@mail.tains.tohoku.ac.jp)または永益(nagamasu@inet.museum.kyoto-u.ac.jp)までお知らせ願います。これまでに気付いたものをお詫びとともに、次のように訂正します。

目次ページ 37 38

p.3 原則II 訳注を「原著の"type"の本書での訳語は"タイプ"とした。」と変更

p.19 実例7 Britton & Brown Britton (in Britton & Brown

p.37 第19.7条 Legminosae Leguminosae

p.59 実例11. iridifolila iridifolia

p.116 右段下から8行目 *Asplenium dentatum* *Asplenium dentatum*

おわりに本書が日本植物分類学会から発行されたことに対して、会長、評議員各位および学会会員の皆様に心からお礼を申し上げます。また、本邦訳委員会の各委員はそれぞれの本務に多忙を極めながらも熱心にご協力いただきました。深く感謝します。

日本分類学会連合および植物分類学関連学会連絡会の活動報告

担当幹事 綿野泰行

日本分類学会連合 (<http://www.bunrui.info/db/index.html>) は、今年で早くも設立3年目を迎えました。参加学会数は現在27です。1月10日に第3回総会が開催されましたので、その内容を報告いたします。

まず、2年の任期を終えたことにより、役員の変更が行われ、国立科学博物館の松浦啓一さん(日本魚類学会)が新会長となりました。役員で植物関係の方は山形大の原慶明さん(副会長)、東大の伊藤元己さん(会計)、千葉大の朝川毅守さん(WEB)、東京女子大の益山樹生さん(監査)です。

この一年の活動での新しい点を列挙してみます。まず“日本産生物種数調査”の結果がWEB上で公開されました、連合のホームページからリンクがついています。今後、新種記載の際には報告をもらうなどして毎年改定していく予定だそうです。また、科研費の研究成果公開促進費“日本産タイプ標本データベース”が採択され、現在は陸上植物のみですが、試験的に“JTYPES”というデータベースが公開されています。これも、連合のホームページからリンクがついています。まだほんの一部ですが、タイプ標本の写真とのリンクもあり、ラベルが十分読める解像度の写真が開きます。例えば *Arisaema* で検索して、typeという列に[DB No. 00***]書いてあるものの“detail” “photo”とクリックしてみてください(写真は、私のコンピューターではMacだと開きますが、Windowsだと開きません)。前年の活動報告で紹介した一般向けのメーリングリスト TAXA も昨年年末に開設されました。このメーリングリストは連合の参加学会の会員だけでなく、誰でも参加できます。参加を希望される方は、1) メールアドレス、2) 氏名(日本語表記ならびにローマ字表記)、3) 所属を明記の上、TAXA 運営担当の三中信宏氏(taxa-admin@ml.affrc.go.jp)までご連絡くださいとのことです。

総会の後は、恒例のシンポジウムが開催されました。1月10日の午後が“移入種と生物多様性の攪乱”、1月11日が“新種記載をスピード・アップする方策を探る”という題目でした。私は移入種の方しか聞きませんでした。極めて盛況で、ブラックバス問題などでは日本釣振興会(会長 麻生太郎氏)、釣魚議員連盟(会長 綿貫民輔氏)、タレントの清水国明氏、学者の池田清彦氏など、実名をあげての対立の構図の説明があり、生々しい話を聞くことができました。

連合の今年度からの新しい企画としては、2月1日から3月15日の期間、ジュンク堂書店池袋本店で、連合の参加学会の宣伝イベントが開催されます。これは、7階(理工書フロア)の一角にある展示スペースで各学会の出版物等を展示・販売するものです。日本植物分類学会も参加し、命名規約・雑誌・絵葉書などを販売します。展示・販売だけでなく、週1回程度ギャラリートークも行われます。テレビのいきもの番組などで活躍されている先生方を生で見るチャンスと思われまます。

植物分類学関連学会連絡会の活動としては、日本植物学会においてシンポジウム“植物の進化に対する昆虫のインパクト - 植物と昆虫の共進化に関する最近の話題より”を開催しました。今年度は、3年ごとに作っている合同名簿の改定の年に当たるため、その作業をすすめ、今年度中に発行の予定です。

お知らせ

日本植物分類学会第3回大会公開シンポジウムのお知らせ

日本植物分類学会第3回大会準備委員会

公開シンポジウムを以下のように開催いたします。参加費は無料です。

【日時】3月13日(土) 14時から17時まで

【会場】広島大学大学院理学研究科E棟102講義室

【テーマ】植物の陸上化への歩み - その足取りを探る -

【プログラム】

- 14:00 - 14:10 公開シンポジウムにあたって
- 14:10 - 14:40 野崎久義(東京大学大学院理学研究科)
「陸上化に向かった緑色藻類 - 形態情報と分子情報からの推測」
- 14:40 - 15:10 加藤雅啓(東京大学大学院理学研究科)
「孢子体の進化, コケ植物の孢子体の新解釈」
- 15:10 - 15:40 長谷部光泰(基礎生物学研究所)
「現生陸上植物の共通祖先形態推定への挑戦」
- 15:40 - 16:10 嶋村正樹(地球環境産業技術機構)
「細胞分裂様式から見た植物の陸上化への歩み」
- 16:10 - 16:40 佐藤敏生(広島大学大学院理学研究科)
「コケ植物のSODとその進化的考察」
- 16:40 - 17:00 総合討論

総会における審議事項について

庶務幹事 遊川知久

3月14日(土)に開催される総会において、以下の議案が審議されます。会員各位の参加をお願いいたします。

- (1) 2003年度事業報告案(7ページ参照)
- (2) 2003年度決算報告案(8ページ参照)
- (3) 2004年度事業計画案(9ページ参照)
- (4) 2004年度予算案(10ページ参照)
- (5) 評議員選挙について

2002年10月に行われた評議員選挙では、同数得票者が出たため抽選で選出し

た。しかし、会則中役員等の選出に関する細則には、評議員選挙の同数得票者が出た場合の規定はない。そこで、下記細則の変更が必要になる。

< 現行 >

第4条 評議員は、会員の郵送投票により8名を選出し、選出された評議員により約4名の評議員を、得票数を参考に、分類群、地区の均整などを考慮して追加指名する。

< 変更案 >

第4条 評議員は、会員の郵送投票により得票数順に上位8名を選出する。複数の候補者が同数票を獲得したため上位8名を決定できない場合は、最下位同数得票者について抽選を行い、上位得票者とあわせて8名を選出する。選出された評議員により約4名の評議員を、得票数を参考に、分類群、地区の均整などを考慮して追加指名する。

附則 本会則は2004年3月14日より実施する。

(6) その他

IAPTシンポジウム2004開催について

学会賞について

会費滞納について

評議員会開催のお知らせ

庶務幹事 遊川知久

日本植物分類学会第3回大会の開催に合わせ、下記の通り評議員会を開催します。関係各位の出席をお願いいたします。

日時： 3月13日(金曜) シンポジウム終了後(午後5時30分を予定)

会場： 未定(関係各位におって連絡します)

評議員会においては、総会における審議事項と同様の内容が審議されます。審議事項についてご意見、ご希望がございましたら、評議員、会長、幹事、委員のいずれかにお伝え下さい。

2004年度野外研修会のお知らせ

庶務幹事 遊川知久

今年度の野外研修会は、須賀瑛文様と吉田國二様に世話人をお願いし、9月18～20日の予定で岐阜県、愛知県で行います。おもに湿地や溜め池の植物を観察します。詳細はニュースレター5月号でお知らせいたします。

2003年度事業報告(案)

(1) 集会等の開催

- ・講演会の開催
 頌栄短期大学保育科(12月14日)
- ・年次学術集会(日本植物分類学会第2回大会)の開催
 神戸大学(3月14-16日)
- ・野外研修会の開催
 徳島県(11月8-9日 世話人:小川誠氏)

(2) 出版物の刊行

- ・学会誌の発行
 英文誌: Acta Phytotaxonomica et Geobotanica Vol.54 (1), (2) 2冊
 和文誌: 日本植物分類学会誌 第3巻1号, 2号 2冊
- ・ニュースレターの発行 No.8, 9, 10, 11 4冊
- ・国際植物命名規約(セントルイス規約)2000 [日本語版]

(3) 委員会活動

- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会
- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会
- ・植物データベース専門委員会
- ・国際植物命名規約邦訳委員会

(4) 日本植物分類学会賞

- ・日本植物分類学会賞の選考と授与

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・学会連合等との連絡: 日本学術会議、植物分類学関連学会連絡会、自然史学会連合、日本分類学会連合など
- ・IAPT シンポジウム2004 準備委員会の活動

(6) その他

- ・バックナンバーの販売
- ・植物分類学関連情報(学術集会、研究動向、出版物、公募)を収集し、ニュースレター、ホームページ等で提供
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換
- ・植物分類学マニュアルの編集(継続)
- ・シカ植食防止要望書の提出
- ・国立情報学研究所電子図書館サービス(NACSIS-ELS)の利用契約

2003年度決算報告(案)

通常会計		単価	員数	2003年度予算	2003年度決算	予算との差異	
収入 会費							
一般会員		5,000	780	3,900,000	3,141,000	759,000	
学生会員		3,000	72	216,000	123,000	93,000	
団体会員		8,000	37	296,000	208,000	88,000	
別刷り(APG)		180,000	3	540,000	91,130	448,870	
別刷り(和文誌)		40,000	2	80,000	96,580	16,580	
バックナンバー販売				100,000	491,000	391,000	
利息				80	20	60	
雑収入				50,000	171,891	121,891	注1
小計				5,182,080	4,322,621	859,459	
繰越金				5,181,290	5,181,290	0	
合計				10,363,370	9,503,911	859,459	
支出 印刷費							
APG(54(1); 54(2))印刷費		1,000,000	2	2,000,000	1,564,968	435,032	
APG 別刷り・カラー印刷費		180,000	2	360,000	178,815	181,185	
和文誌印刷費(3(1), 3(2))		450,000	2	900,000	1,106,700	206,700	
和文誌別刷り印刷代		50,000	2	100,000	85,145	14,855	
NL印刷費		80,000	4	320,000	325,005	5,005	
封筒等印刷費				200,000	187,950	12,050	
送料・通信費							
APG 送料		110	2,000	220,000	221,110	1,110	
和文誌送料		145	2,000	290,000	299,948	9,948	
NL 送料		110	2,000	220,000	232,945	12,945	
その他小包など				200,000	139,080	60,920	
事務費							
消耗品費				50,000	22,640	27,360	
アルバイト賃金(含発送代行)				180,000	158,989	21,011	
自然史学会連合負担金				20,000	20,000	0	
総会費				0	0	0	
学会賞賛金・表彰		30,000	2	60,000	60,000	0	
大会補助費				100,000	0	100,000	注2
会議費				130,000	0	130,000	
英文校閲費				180,000	0	180,000	
手数料・その他				30,000	10,815	19,185	
自動振替口座確認手数料		100	100	10,000	10,041	41	注3
予備費				200,000	18,060	181,940	注4
講演会補助費				30,000	0	30,000	
小計				5,800,000	4,642,211	1,157,789	
次年度への繰越				4,563,370	4,861,700	298,330	
合計				10,363,370	9,503,911	859,459	
特別会計				予算	決算	予算との差異	
収入							
前年度繰越金				1,887,479	1,887,479	0	
命名規約邦訳販売収入				1,600,000	884,000	716,000	
利息				180	0	180	
合計				3,487,659	2,771,479	716,180	
支出							
命名規約邦訳出版経費				1,500,000	1,080,560	419,440	注5
次年度への繰越金				1,987,659	1,690,919	296,740	
合計				3,487,659	2,771,479	716,180	

注1: 内訳は著作権料約14.5万、タイトル収入約1.5万、神戸大会差額約1.2万

注2: 神戸大会実行委員会のご尽力により、大会参加費等のみで運営していただいたため

注3: 集金代行手数料3000円、消費税1341円を含む

注4: 井上健氏葬儀献花・弔電

8 注5: 印刷費約87万、発送費等約20.6万、ISBN登録料1.2万

2004年度事業計画(案)

(1) 集会等の開催

- ・講演会 1回
- ・年次学術集会(日本植物分類学会第3回大会:広島大学(3月13-15日))の開催
- ・野外研修会の開催(愛知県で予定)
- ・アジアの植物多様性と分類に関する国際シンポジウム(IAPTシンポジウム2004)

(2) 出版物の刊行

- ・学会誌の発行
英文誌: Acta Phytotaxonomica et Geobotanica Vol.55 (1), (2), (3) 3冊
和文誌: 日本植物分類学会誌 第4巻1号, 2号 2冊
- ・ニュースレターの発行 No.12, 13, 14, 15 4冊
- ・植物分類学関連学会連絡会合同名簿

(3) 委員会活動

- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会
- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会
- ・植物データベース専門委員会

(4) 日本植物分類学会賞

- ・日本植物分類学会賞の選考と授与

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・学会連合等との連絡: 日本学術会議、植物分類学関連学会連絡会、自然史学会連合、日本分類学会連合など
- ・IAPTシンポジウム2004実行委員会の活動

(6) その他

- ・バックナンバーの販売
- ・植物分類学関連情報(学術集会、研究動向、出版物、公募)を収集し、ニュースレター、ホームページ等で提供
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換
- ・植物分類学マニュアルの編集(継続)

< 参考資料 >

会員数(人)(2004.1.4現在)	男性	女性	計
国内一般会員	696	88	784
学生会員	51	26	77
海外個人会員	9	1	10
名誉会員	13	2	15
計	769	117	886

2003年度分の会費未納者(2004.1.4現在)			
一般会員 220人	学生会員	22人	
上記のうち、2002年度分の会費も未納の者			
一般会員 114人	学生会員	20人	

2004年度予算(案)

通常会計

		単価	員数	2004年度予算	前年度予算との差異
収入					
会費					
	一般会員	5,000	780	3,900,000	0
	学生会員	3,000	77	231,000	15,000
	団体会員	8,000	38	304,000	8,000
	別刷り(A P G)	150,000	3	450,000	90,000
	別刷り(和文誌)	75,000	2	150,000	70,000
	バックナンバー販売			100,000	0
	利息			20	60
	雑収入			50,000	0
	小計			5,185,020	2,940
	繰越金			4,861,700	319,590
	合計			10,046,720	316,650
支出					
印刷費					
	APG(55(1, 2, 3))印刷費	800,000	3	2,400,000	400,000
	APG別刷り・カラー印刷費	100,000	3	300,000	60,000
	和文誌印刷費(4(1), 4(2))	500,000	2	1,000,000	100,000
	和文誌別刷り代	50,000	2	100,000	0
	NL印刷費	80,000	4	320,000	0
	封筒等印刷費			200,000	0
送料・通信費					
	APG送料	110	3,000	330,000	110,000
	和文誌送料	145 注1	2,000	290,000	0
	NL送料	110	2,000	220,000	0
	その他小包など			200,000	0
事務費					
	消耗品費			50,000	0
	アルバイト賃金(含発送代行)			180,000	0
	自然史学会連合負担金			20,000	0
	総会費			0	0
	学会賞賛金・表彰	30,000	2	60,000	0
	大会補助費			100,000	0
	会議費			130,000	0
	英文校閲費		注2	360,000	180,000
	手数料・その他			30,000	0
	自動振替集金代行基本料			3,150	3,150
	自動振替口座確認手数料	111 注3	100	11,100	1,100
	予備費			200,000	0
	講演会補助費		注2	60,000	30,000
	分類学会連合分担金			10,000	10,000
	植物分類学会関連学会連絡会合同名簿			160,000	160,000
	小計			6,734,250	874,250
	次年度への繰越			3,312,470	1,250,900
	合計			10,046,720	316,650
特別会計					
収入					
	前年度繰越金			1,690,919	196,560
	命名規約邦訳販売収入			255,000	1,345,000
	利息			0	180
	合計			1,945,919	1,541,740
支出					
	IAPTシンポジウム経費			500,000	500,000
	次年度への繰越金			1,445,919	245,000
	合計			1,945,919	745,000
	注1: 和文誌とNL2回を同時発送する場合の送料見積もり				
	注2: 2003, 2004年度分をあわせて払うため				
	注3: 消費税を含む				

会費納入と自動振替利用のお願い

会計幹事 横山潤

本学会の会費は前納制で、一般会員 5,000 円、学生会員 3,000 円、団体会員 8,000 円です。納入状況はニュースレター送付の際の宛名書きの右下に「納済会費：数字」という形で示してあります（自動振替制度をご利用の方は、数字の代わりに「自動振替」と記入されています）。この数字が 2004 未満の方は、以下の郵便振替口座にお早めに納入いただきますよう、よろしくお願い致します。

口座番号：00120 - 9 - 41247

名 義：日本植物分類学会

現在 200 名以上の会員が 1 年分、さらにそのうちの 100 名以上の会員が 2 年分の会費をお納めいただけていません。この分だけで 150 万円以上の減収になっております。上記納入年度をご確認の上、速やかな未納分の解消にご協力下さいますよう、お願いいたします。

ご承知のように昨年度より会費納入に自動振替をご利用頂けるようになっております。会計事務削減のため、なるべく本制度をご利用頂きますよう、よろしくお願い致します。ご希望の方は、自動振替依頼書にご記入・ご捺印の上、随時会計幹事にお送り下さい（ただし 2004 年度の会費引き落とし手続きは終了しておりますので、ご利用は 2005 年度からになります）。依頼書をご希望の方は会計幹事までお問い合わせ下さい。

その他、会費納入に関するご質問、納入状況のご照会など、随時承っておりますので、お気軽にお知らせ下さい。会計幹事の連絡先は、ニュースレター巻末をご参照下さい（会計幹事のメールアドレスが変わりましたので、ご注意下さい）。

メールアドレスご確認のお願い

会計幹事 横山潤

先日大会実行委員会からお送りいたしましたお知らせのように、緊急を要するお知らせの際には、今後も電子メールを活用させていただこうと考えております。そこで、異動などに伴いましてメールアドレスが変更になりました会員の方は、住所変更とあわせてメールアドレスの変更に関しましても、会計幹事の方にお知らせ下さい。ドメインの変更等で、メールアドレスのみ変更となる場合もあるかと存じますが、その際もお手数ですが会計幹事までおしらせ下さい。現在登録されておりますメールアドレスの中にも、既に一部使用できないアドレスがございますので、お心当たりの方は会計幹事までご一報ください。

故井上健先生の別刷り集をお分けいたします

信州大学 内貴章世

井上先生の奥様、井上和子さんが昨年12月に井上先生の荷物整理のために信州大学に来られた際、「別刷りはこのままだと処分するしかないので、活用していただけるならご自由にどうぞ」とおっしゃってくださったので、以下の要領で井上先生の別刷り集を希望される方に送付させていただくことにしました。

送付先を記入した**着払い**の伝票を「ゆうパック(小)の袋(郵便局などで100円で販売)」に貼り付け、封筒に入れて3月25日までに下記まで送付してください。送付実験をしてみたところ、普通の封筒で送付すると破損してしまいますので、これ以外の方法ではお受け致しかねます。仕分け・発送など全て一人でやっておりますのでご協力をお願いいたします。

送り先

〒390-8621

長野県松本市旭3 - 1 - 1
信州大学理学部生物科学科
内貴 章世

問い合わせ

Tel. & Fax: 0263-37-2908

E-mail: naiki@gipac.shinshu-u.ac.jp

3月25日以降は以下にお問い合わせください。

佐藤利幸(信州大学理学部生物科学科)

Tel. & Fax: 0263-37-2495

toshibo@gipac.shinshu-u.ac.jp

なお、別刷り集の中から希望されるもののみを送付することはできないこと、別刷りは全てが揃っている訳ではないということ、また別刷りによって数量に差がありますので、後の方で申し込まれると別刷り数が少なくなることをご了承ください。数に限りがありますので、無くなった際にはご容赦願います。

この案内は日本植物分類学会ホームページおよび種生物学会ホームページにも掲載されています。

信州大学理学部植物標本庫 (SHIN) のご案内

信州大学 内貴章世

信州大学理学部植物標本庫は、1960年に信州大学繊維学部へ赴任された清水建美先生(清水植物研究室:信州大学名誉教授、金沢大学名誉教授)によって開設され、同時にSHINのコードを付けてIndex Herbariorumへ登録されました。現在、長野県植物研究会の方々が精力的に採集された長野県産植物標本を中心に、約25万点の維管束植物のさく葉標本が収められています。

標本庫は2002年秋にレンガ造りの建物(医学部から借用)に移動しました。標本室4室と閲覧室からなっています。標本は主として木製キャビネットに収められており、被子植物の標本はもともと科名のアルファベット順に並んでいましたが、移動の際に業者の不手際で順序がかなり狂ってしまったらしく、私が着任した時には使える状態にはありませんでした。これを是正するために昨秋から取り組んでおり、新たにキャビネットに通し番号を付け、被子植物を双子葉と単子葉に分け、双子葉植物、単子葉植物、裸子植物、シダ植物、各々の科のアルファベット順に配列し直すことにしました。さらに、科のラテン名と和名の索引を作り、キャビネット番号と対応させて、標本にアクセスしやすくしました。

閲覧室は広くはないですが、観察用机、双眼実体顕微鏡、ライトのほか、文房具セット、アノテーションカードなどを準備して閲覧の便を図り、また、パソコンを新規購入し、データベース化されているものは閲覧室で検索できるように準備を進めていますので、各分類群の研究、地域フロラの研究等に大いにご活用ください。

最後に、標本庫整理に関して様々な助言を下さいました清水建美先生、データベース管理に関して助言を下さいました金井弘夫先生(国立科学博物館名誉館員)、標本庫の備品・消耗品購入に関して相談に乗って下さいました佐藤利幸先生(信州大学理学部)にお礼を申し上げます。

標本の閲覧・貸出などに関しては、以下までご連絡ください。

信州大学理学部 〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1

内貴章世 Tel & Fax: 0263-37-2908 E-mail: naiki@gipac.shinshu-u.ac.jp

佐藤利幸 Tel & Fax: 0263-37-2495 E-mail: toshibo@gipac.shinshu-u.ac.jp

高橋耕一 Tel & Fax: 0263-37-2533 E-mail: koichit@gipac.shinshu-u.ac.jp

編集後記

家の前の湖では、冬まで残ったホテイアオイを冬鳥がせっせとついばんで片づけてくれました。昨秋拾った猫も、帰化植物退治に一役買おうというのか、打ち上げられたホテイアオイをせっせと家に持ち帰ってきます。君の努力はわかったから、家の中を腐ったホテイアオイだらけにするのは、もうやめてください。・・・では、原稿お待ちしております！

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学博物館 西田佐知子
電話：052-789-5764 ファックス：052-789-5896
Email: nishida@num.nagoya-u.ac.jp

2003年度日本植物分類学会講演会

講演会担当委員 福岡誠行

昨年度の講演会は12月14日に神戸市の頌栄短期大学で開催しました。演題を兵庫県の植物相に絞って、次のかたがたに講演していただきました：三宅慎也(神戸森林植物園)「六甲山の植物」、高橋晃(兵庫県博)「溜池(西脇市)周辺にみられる植物の今と昔」、小林禎樹(兵庫健康環境センター)「兵庫県産テンナンショウ属」、黒崎史平(頌栄短大)「兵庫県レッドデータ・ブック」。最後に北川尚史(奈良産業大学)氏に「ヒメジャゴケについて」講演いただきました。参加者は45名でした。いつも思っていることですが、広報の方法に工夫が必要です。

講演終了後、頌栄で懇親会をもちました。立食形式が幸いしたのか、会話が盛り上がりました。この程度でよかろうと用意していた飲み物が、あっという間になくなりました。

多芸多才な分類学会講演会

環境設計株式会社 梅原徹

足と目の成果

「前座ですから」で始めた三宅さん、「そんなひがまん」とすかさず突っこむ福岡先生、さすが関西、頌栄での講演会の幕開けである。

するどい視線で六甲山地をくまなく歩かれた三宅さんは、きれいなスライドでフロラの特徴を解説された。圧巻は直前に得られたオオクボシダの回覧で、実に四半世紀ぶりの再確認であった。

昔の標本を生かす

50年前、西脇市の天神池で田中兼治氏が採集された標本が整理されたのを機に、高橋さんたちがその後のフロラ変遷を知ろうと同地を再調査された。

当時採集された草原性種はすでになく、湿地性の種も一部しか残っていなかったという。しかし近隣では分布西限の更新となったクロミノニシゴリほか、いくつか注目すべき種が発見された。

目の保養

小林さんは兵庫県産テンナンショウ属の分類や地理分布をまとめて解説された。とくに近年に再発見されたセツピコテンナンショウの多数の写真は、目の保養になった。雄花にくらべて雌花の花梗が長いこと、葉は2枚になる場合があることなど、重要な知見もあわせて披露された。

ハーバリウム命

兵庫県は2003年にレッドデータブックを改訂したが、黒崎さんは新版でランクが変わった理由を種ごとに解説された。

フロラを調べる人が増えたり、環境調査からもたらされる標本が増えたことなどが改訂に役立ったとされ、標本庫の充実こそが信頼できるレッドデータブックの基礎だと強調された。

さて真打ちは

北川先生といえば最後の分類地理学会の講演を思い出す。話は枕だけに終わったが、「分類学者は退職後に新種を書いてはいけない」などなど。今回もひそかに期待したのだが、ヒメジャゴケからあまり脱線することはなかった。風邪気味で調子がよろしくなかったとのこと、次回に期待しよう。

大団円

講演終了後、実習室での懇親会は学生コンパの趣で、あちこちに人の輪ができ、話はずんだ。福岡先生はじめ、お世話いただいたみなさま方に感謝します。

書評

横浜の植物

高橋秀男・勝山輝男・田中徳久 監修，横浜植物会 編集・発行，2003年7月発行。

A4判，カラーグラビア32頁・本文1,325頁．定価9,500円（本体）。

取扱：有隣堂本店（Tel: 045-261-1231）。

本書は、横浜植物会の創立90周年記念事業としてまとめられた、会の研究を集大成した横浜の植物百科である、と紹介チラシに記されている。まず最初に驚くのは本の厚さである。横浜市というそれほど広くない地域で、これだけの厚さの本に何が書かれているのだろうか？とページを繰ってみた。

章立てはI章からVIII章まであり、I章には横浜の地形や気象など自然環境の概況が、II章には横浜に分布する維管束植物の数や分布上注目すべき植物、横浜市各区の植物相の概要が述べられている。また、コケ植物の目録と海藻類についての記述がある。

III章は本書のメインとなる維管束植物誌で、横浜市に自生または帰化・逸出しているシダ植物・種子植物の種・変種などに、雑種および絶滅したと思われる種を加え、193科2,052種類（見出し数）をとりあげている。神奈川県植物誌2001の編纂に合わせて本書の作業を行い省力化したようだが、それでも48,000点以上の標本をデータベース化して基礎にしたということであまりへんな作業量だろう。本文には属への検索表、種・変種への検索表があり、各種ごとの解説にはおもに見分けるのに必要な記述をのせ、最後に【花期】【分布】生育環境などを示した【生育地】、レッドデータ評価を示す【RD度】、【標本】の各項目をまとめて載せている。標本データベースから作成した横浜市域の分布図と、線画の植物図も付けられている。植物図は全体図もあるが、種の記述担当者自身の手になる部分図が充実しており、種を見分けるという目的のために相当の努力が払われている。これだけ充実した植物誌はあまりない。

後半には、植物研究史 (IV 章) や植物相の変遷 (V 章) 樹木と栽培植物 (VI 章) 植物ウォッチング・ガイド (VII 章) 暮らしの中で (VIII 章) の各章がある。横浜の名木・古木 (VI 章) や植物観察適地 (VII 章) 等の項では、各事項についての解説だけでなく、最寄の駅からのバスや徒歩での行き方や地図、写真も載せられておりなかなか行き届いている。さらに VIII 章では、生活の中での植物とのかかわりや方言など、意識しなければ薄れていくであろう民俗植物学的な記録も残そうとしている。紹介チラシの中で本書の特色として、市民がつくったみどりの戸籍簿 - 横浜植物百科 - と記されているが、まさしく横浜で植物を愉しむためにあらゆる方面からの情報を満載している。

以上が本書の概要だが、博物館に勤務する私にとって興味深かったのは、本文最後の記事である。そこには編集者、執筆者のほか、調査者、標本提供者、同定協力、調査指導、標本受付・整理・登録・データ管理にかかわった人達や協力機関などが記されている。ちなみに執筆者は 46 名、標本提供者は 73 名が数えられる。この項をみると、この本が作られるまでにプロ・アマ含めた植物研究者がどのように組織され、仕事を分担してきたのかがわかる。どこでもこのような体制で仕事ができるわけではなく、やはり 90 年という歴史ある横浜植物会だからこそできたという面があるだろう。しかしながら、これから各地で植物誌を作ろうとする場合、参考にすべき点は多い。

(兵庫県立人と自然の博物館 高橋晃)

Historical Biogeography: An Introduction

著 Jorge V. Crisci, Liliana Katinas and Paula Posadas, 発行 Harvard University Press, Cambridge.

2003 年 5 月発行. 250 頁 (ハードカバー). 定価 45 USD (本体). ISBN 0-674-01059-0

生物地理学は簡単に定義すると「生物の地理的分布の研究」となるが、その中には様々な生物地理学がある。その中でも特に現在の地理的分布がどのような歴史のもとに成立したのかを明らかにする分野を「歴史生物地理学」と呼んでいる。本書はそのよい教科書である。

歴史生物地理学といってもその中には解析の対象や手法、視点などにより幾つかの分野に細分される。例えば、汎生物地理学 (Panbiogeography) や分断生物地理学 (Vicariance biogeography) 系統生物地理学 (Phylogenetic biogeography) などは聞かれたことがあると思う。私も生物地理学に携わっているが、恥ずかしながらそれらの間の違いや関係となるとなかなか難しくあいまいな答えしかできない。そうしたときに本書はとても役に立つと思う。

本書はイントロダクションを含めて 3 章からなる。イントロでは「歴史生物地理学とは何か?」という題名で歴史生物地理学を定義する。さらに解析手法を分類して歴史生物地理学には 9 つのアプローチがあることを提唱している。その中にはもちろん上記の 3 つの分野についても触れられている。第 1 章では「歴史生物地理学の方法」と題し、各

9つのアプローチについて解析例を交えながらより詳細に解説がなされる。また最後の節ではナンキョクブナの解析をもとにして各手法の比較が行われている。第2章では歴史生物地理学におけるトピックスとして、以下の3つが取り上げられている。近年著しく発達した分子系統学と生物地理学、生物多様性と保全、移入種の問題点といったタイムリーな話題が並ぶ。さらに付録においては歴史生物地理学において使用されている様々なソフトウェアがまとめてあるので何かと役に立ちそうである。

著者のお三方は南米アルゼンチンの博物館や大学に在籍されている研究者である。したがって引用される研究例は南米を舞台としたものが多い。日本とアルゼンチンは地球の正反対に位置し、もっとも遠い地域の一つである。したがって日本人にとってかなりイメージしにくい地域かもしれないが、そうした点を除けばコンパクトにまとまった好著と思う。本書を読んで自分でも解析してみたいと思った手法がある。それは最節約固有地域分析：PAE (Parsimony Analysis of Endemicity) という手法である。解析例を一つあげると、南米のアンデス山脈に沿った地域に30地域のコードラートを設定し、その各コードラートに出現する種をリストアップし、その種が分布するかないかのデータマトリックスを作る。その後地域間のフロラの類似度を計算し、クラスター解析を行って固有地域を推定するというものである。結果としては南米のアンデス山脈には2つのクラスターが見られ、それらはチリ北部を境にして北と南に別れて分布した。実は私が現在解析を進めている材料 (*Gunnera magellanica* (グンネラ科)) でも同じようなパターンが検出されており、非常に興味深く読ませてもらった。こうした解析はたぶん日本ではあまり試みられていないと思う。日本列島のフロラでPAE解析を行うとどのような結果が得られるのだろうか。今後機会があれば試してみたいと思った。

(東京都立大学 藤井紀行)

人類の生存を支えた根栽農耕 イモとヒト

吉田集而・堀田満・印東道子(編), 平凡社, 2003年8月発行.
356頁. 定価 5,500円(本体). ISBN4-582-41527-x

「てごわい!」、これが本書を手にとったときの第一印象である。本書は、東南アジア・アフリカを中心とした根栽農耕についての16人の論文集だ。遺物研究、比較言語学、農耕民俗、イモ植物の系譜、根栽農耕における種子農耕、根栽農耕文化論など、実に多様な話題が提供されている。

この種の本を読む私自身の癖で、ざっと目次を見て自分の興味のありそうな部分から読み始めたのだが、そのまま茫漠たる空間に迷いこんでしまった。読む気が失せかけたときに目を落とした「解説・コラム」が気力を復活させてくれた。1章の「根栽農耕とイモ型利用植物」、5章の「根栽農耕と種子農耕」、6章の「根栽農耕文化論」の前半を読み、ようやく自分の無学さを自覚することとなった。編者達は、農耕文化の起源論を

軸に、栽培化と利用、それらの伝搬と拡散、そして多様化というストーリーをイモという栽培植物を通して訴えたかったのだろうか。そう思えるようになるまでに、かなりの時間がかかってしまった。未だに読んでいない自分の不明を恥じつつ、中尾佐助氏の名著「栽培植物と農耕の起源」は基礎知識として必要だったことを痛感した。

勝手なお勧めだが、私のように農耕に疎い読者は、次のような読み方も可能だと思う。6章の「根栽農耕文化論」の前半と1章の「根栽農耕とイモ型利用植物」とに、これまでの根栽農耕に関する概観が納められている。これを基礎知識として、5章の「根栽農耕と種子農耕」を読み進むと理解がよく進むと思う。とくに、「個体の農法」と「群落の農法」という観点は新鮮だった。その上で、2章の「オセアニアの農業」と4章の「アフリカの根栽農耕」を比較して読むと、イモをめぐる農耕文化の面白さを知ることができるだろう。そして最後に、6章後半部というのはどうだろうか。私には、2章や4章にある農耕文化の村ごとの違いの記述は退屈だったが、各論文を森林型根栽農耕とサバンナ型根栽農耕のそれぞれの多様化のパターンの違いとして読み込めば面白さは倍加するだろう（これは読者にかなりの読みこなしが要求されると思う）。

面白かったのは、比較言語学の「名称に基づく系譜の特定」である。実に膨大な言語学的研究の上に構築されたと思われる内容で、イモを指す言葉の系統図が示されている。言語に反映される栽培植物の変遷をどのようにこの結果から読みとるか、あるいは他のデータの結果をどのように重ねてゆくか、今後の研究の発展には系統地理学との相同性を垣間みることができそうで興味深い。一方で、多品種栽培の話題は面白いのだが、もう少し他のイモ類や他地域との比較の上で論じて欲しいと思った。個々の文章が論文形式を採っているため、読者には不親切だ。それぞれに論じられているイモ植物や農耕様式の面白さや問題点について、根栽農耕全体の中での位置づけに乏しい面があり、これは論文集型単行本の欠点であろう。なかには大ハズレと思われる論文も含まれている。ただし、堀田氏による24の「解説・コラム」は、植物解説を中心としながら、なかなかよいナビゲーションをしてくれている。

末尾の付属資料2「栄養器官、特に地下部が食用などに利用される植物」のリスト（事典と言ってもいい）には、36ページにわたって1,000種以上が収録されているという。試しに *Potamogeton* と *Eleocharis* を引いてみた。なるほど。分野によっては、この事典だけでも購入の価値があるかも知れない。それにしても、「世界有用植物事典」の基礎となった「堀田ファイル」（西南日本植物情報研究所蔵）は、膨大な情報量を抱えていることをあらためて思い知らされた。

（大阪市立自然史博物館 藤井伸二）

絶滅危惧植物図鑑レッドデータプランツ

矢原徹一（監修）・永田芳男（写真），山と溪谷社，2003年12月発行。
719頁．定価4,200円（本体）．ISBN4-635-06255-4

絶滅危惧植物の調査は、まずその植物を認識することからはじまる。あたりまえのことだが、実はこれが途方もなく困難であることは、むしろ専門の研究者のほうがよく実感しているのではないだろうか。これまで一度も見たことのない植物を自信を持って同定することはなかなか難しい。また、稀な植物ほど十分な記載や図解の文献に乏しく、一般の図鑑類に至ってはほとんど掲載されていない。そうした植物の写真や図解があれば、野外での調査もずいぶん楽に違いない。

これまで地方版も含めて様々な形で絶滅危惧植物の写真集や解説本が出版されてきた。貴重な植物写真の掲載に驚嘆する一方で、写真掲載されていない種類の多さに失望することも多かった。今回の「レッドデータプランツ」は、「2000年版維管束植物レッドデータブック」に掲載された1,665種類のうち、半数の841種類が写真で紹介されている。この半数という数字は、まさに圧巻という他はない。専門家でもめったにお目にかかれない植物が、生きた状態の写真で撮影されているのである。そもそも探すこと自体がたいへんな種類が多いのだから、それを開花期に見つけて写真に納める苦労は並大抵ではないだろう。

各種の解説には、それぞれの専門家の文章に加え、「撮影記」という形で永田氏のコメントが加えられている。これがなかなかの味を出している。というのは、この図鑑に掲載された植物すべてについて、一人の目を通してみたという膨大な経験と知識が味わえるからだ。一方、専門家の解説は、近似種との形態的差異を強く意識したもので、各種の認識や同定にたいへん役に立ちそうだ。また、減少原因も述べられており、興味深い。個人的には、ノダイオウの雑種化は近畿地方ではかなり危機的だと思うのだが、こうした問題をこの本から発掘することも可能だろう。絶滅危惧植物の将来は、読者の使い方にも大きく依存していることを自覚せずにはいられない。

ところで、絶滅危惧植物841種類で4,200円。1種類あたり5円弱。こんな安い買い物はない？ 2冊余分に買って、各ページを切り抜いて台紙に貼り、ハーバリウムに配架しようと思った私って変？ 本書は、昨夏に事故死された井上健先生の最後のお仕事になってしまったことも申し添えたいと思います。

（大阪市立自然史博物館 藤井伸二）

連絡員からときどき便り

・インタノン山の植物・

大阪市立大 山下純

タイ北部に聳えるインタノン山は植物の宝庫です。私の最初の海外調査がこの山でした。当時（7年前）の私は修士論文を慌ただしく提出したばかり、マラリアと毒蛇への一抹の不安を抱きつつも、期待で一杯でした。その時の思い出など。

私が参加させていただいた調査は、カセサート大学、BKFと共同で行っている大阪市立大学のプロジェクトでした。大阪市立大学の植物生態学研究室がコドラート調査のために借りている山腹の宿舎に泊まり、田村実博士にくっついてあちこち回りました。朝霧の立ち上る山頂の常緑広葉樹林。山頂部の森のメンバーは日本とよく似ていますが、満開の着生ランが見事でした。また、アマドコロ属の *Polygonatum punctatum* も着生していました。中腹のワチラタン、メイパンなどの名瀑。ワチラタン滝周辺は、落葉混交林 / dry dipterocarp forest の中の gallery forest です。メイパン滝周辺は、落葉混交林の中に常緑広葉樹林が広がります。日本にはない数々の種に、私はすっかり魅了されました。無我



溪岸斜面に長い根茎を這わせる *Campylandra siamensis*

夢中の採集から戻って、生態研の方々と囲んだタイ料理の夕食の味は忘れられません。採集物を日本に持って帰るには徹夜してでも土を洗わなければならないと知った最後の晩は辛かったのも、良い思い出です。オモト属の *Campylandra siamensis* Yamashita et M. N. Tamura とジャノヒゲ属の *Ophiopogon siamensis* M. N. Tamura の新種記載では、この時採集した標本も参考にされました。また、溪岸のウスバクジャクの近くにそれとよく似たシダがありました。これは *Hymenasplenium inthanonense* N. Murak. et J. Yokoy. のようです。この他、過去の植物目録にない種が幾つもありました。インタノン山は何度も学術調査がされていますが、今後もまだまだ面白い発見があるだろうと思います。この次にはチェンダオ山に行ってみたいと思います。

チイ便り・2・～お墓のチイ～

国立環境研究所・学振 大村嘉人

地衣類は、樹皮、土、蘚苔類、岩石、コンクリートなど様々な場所に着生している。極端な生育場所としては、アザラシのミイラの上や、ほとんど動くことのないゾウムシの背中にまで付くことがあるそうだ。海岸から高山まであらゆる場所に生育する地衣類ではあるが、初心者の方はどこで地衣類が簡単に観察できるのか最初は戸惑うものである。そこで、私は地衣類が観察できる身近な場所の一つとして‘墓地’をお薦めしたい。

地衣類は日当たりや風通しが良いところを好み、乾湿のサイクルが生育に必要である。墓地は大体どこも同じように拓けていて日当たりが良く、墓石との間隔もほどよく風が通る配置となっている(写真A)。朝早くお墓の地衣を見ると瑞々しく湿っているが、これは夜露によるものと思われる。お参りに来る人はお墓に水をかけていくし、水鉢や花立には水が溜まっているために、墓地の空中湿度が高くなるのだろう。湿っていた地衣体は日中になればさっと乾くので、乾湿サイクルについても問題ない。墓石は何十年も何百年もその場所にあるために、墓石表面にはその場所の環境を反映した岩上生の地衣類相が形成されていく(写真B)。墓石には大きく分けて昭和初期以前の研磨していないタイプとそれ以降の研磨してあるタイプの2つがある。地衣類にとって都合が良いのは前者の表面がガサガサしたタイプである。研磨してあると容易に脱落しやすく大形地衣類は着生しにくい。

さらに、地衣類を用いた生態学研究にとって墓地は絶好の場所なのである。上述したように墓地の環境が大体同じであるばかりか、檀家の関係で墓地は様々な地区に適度に散在している。従って、環境要因と地衣類の分布との関係を調べたり、長期的なモニタリングサイトとして利用したりするのに好都合なのである。実際、日本で初めて大気汚染と地衣類との関係を明らかにした研究は、墓地を調査地点に選んでウメノキゴケとSO₂濃度との明瞭な関係を示したし、海外ではイギリス地衣学会が‘Churchyard Project’として教会墓地を調査地として地衣類の分布調査や保全活動等にも取り組んでいる。

かく言う私もお墓の地衣類を見て回っている。「調査でお墓のを見て回っています」と住職さんに話しかけるとほとんどの場合調査を快諾してもらえる。そして、「古いお墓ならこっちにもあるよ。これは江戸時代の隠れキリシタンのお墓で...」と解説やありがたいお話が始まり、気が付いたら本当に日が暮れていたことがあった。



A. 墓地の様子 B. 地衣類がよく付いている墓石。
黒矢印：ウメノキゴケ、白矢印：コフキジリナリ

入会申込、住所変更、退会届、会費納入、購読
申込などは下記へご連絡ください。

〒980-8578 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉
東北大学大学院生命科学研究科生態システム生命
科学専攻

日本植物分類学会 横山潤（会計幹事）

Phone:/Fax: 022-217-6689

E-mail: jyokoyam@mail.tains.tohoku.ac.jp

会費：一般会員 5,000 円、学生会員 3,000 円、

団体会員 8,000 円

郵便振替 00120-9-41247

平成 16 (2004) 年 2 月 18 日印刷

平成 16 (2004) 年 2 月 25 日発行

編集兼 名古屋市千種区不老町

発行人 名古屋大学博物館

西田佐知子

発行所 つくば市天久保 4-1-1

国立科学博物館筑波実験植物園

日本植物分類学会